



秘魯國マリヤルヅ船一件

1665



414
A 634



呼出セシニ船司此若ク同船ヨリ脱定ニオヨビタル趣又其他ノ船
 越申立タリ依之我國官員右一人ノ者ヲ請返リ即郵船司
 ノ保護ヲ懇願シ且自身並同船ノ船客中ニテ昔酷ノ取扱ヲ請シ
 來リタル趣ヲ以テ同人ヨリ我國官員ヘ之ヲ報知セリ此者我政府
 者一八英國軍艦「アイロンデュー」號ニ扶上ラレ同國領事ヘ送リ
 事情モナカリシニ同八日ニ至リ同船ヨリ泳キ出テ所容無事セカ
 六月五日ヨリ同八日ニ至ル迄ハ曾テ日本官府ノ不審ヲ起スヘキ
 ンハ其終疾ク洋面ニ浮ミ其航路ヲ遂テシナラン
 タメ終ニ之ニ關與セサルヲ得ルニ至リシナリ若レ此事起ラス
 セサリシハ然ルニ爰ニ其船司共責ヲ通レ難キ事由起リ共カ
 間ヲナセシ事モナク又之ニ關與セシ事モナク何等ノ事ニモ關與
 民アルヲ知レリ然レ共日本官員ヨリ右船或ハ其船司ニ付次テ查
 類ヲ神奈川縣廳ヘ預テタルニヨリ同船中嘯港ヨリ被圍ヘ赴ク移
 入泊船場ヲ離レ遠ク港内ニ投錨セリ而シテ同船ノ船司共船
 壬申年六月五日「マリヤル」船修復ノタメ神奈川港ヘ入進ト通常
 被圍國バルク形「マリヤル」船二件

大正十一年四月贈

客ニ對シ告訴スベキ廉アル趣申立タリ其後右船司最早右一件ニ付毛頭故障不申立且此者ニ對シ聊カ戒責ヲ加ヘサル趣我官員ヘ申出タルニヨリ即チ共者ハ右船司ヘ引渡タリ然ルニ圖ラリサキ右船司我官員トノ約言ヲ破リ右ノ者免許ナク自儘ニ共船ヲ立出タル科ヲ以痛ク之ヲ拷問シ共者ハ言フニ及ハス其他乗組ノ者追モ大ニ苦痛ヲ受テタレハ痛哭ノ聲現ニ「アイロ」ン「デュ」ク「船」ヘ聞ヘレニヨリ早速同船ノ士官ヨリ右景況ヲ不列顛代理公使ワフツトソン氏ヘ申出タリ依之同氏「マリヤル」船ヘ到リ人足共外乗組ノ者ニ逢ヒ委細ノ様子ヲ聞糾ヤン「欲」セ「レ」カ「ト」モ共者共ト接スルヲ拒ミシカバ唯彼等ヲ目撃シタル而已「テ」シ「テ」終ニ接話スルヲ得「テ」シ「ナ」リ然レトモ乗組支那人ノ内或ハ共毛髮ヲ截斷セラレ或ハ打擲ニ遇ヒタル者アレハ是ヲ以殘酷ノ處置ヲ受タル事ヲ確證シ同氏ハ共儘立歸タリ商船ノ船司共旅客ニ對シ右様ノ處置ヲナセシハ船司ノ權ナニアラ「ル」ニ「テ」考「フ」ル趣ヲ以テ同氏ヨリ早速留政府ヘ委細吟味アリ「タ」キ旨掛合越タルニヨリ夫々吟味ニ及ヒシナリ

我官員ヨリ右支那人ヲ船司ヘ引渡タル後復タ他ノ支那人「アイロ」ン「ア」ユ「ク」船ヘ派キ來リ前ノ支那人痛ク呵責ヲ受タル趣且共毛髮ヲ截斷セラレタル始末等ヲ逐一申陳シ且共外ノ旅客モ夥シク中ヨリ水中ニ飛込脱走セント計リタリシカ終ニ其意ヲ果サス船ノ者ニ見當ラレ共儘船ヘ連歸ラレタル由ヲモ陳述セリ前條ノ次第ハ先儘置キ今爰ニ左件ヲ指明セン第一 右船司ノ取爲ニヨリ共旅客船中ニ止ルヨリ率口危險ヲ肩シテ逃出ントスルニ立到リシナリ事情此ノ如キニ至リシ追ハ我政府聊タリ共船司並共船ニ關係セザリレナリ第二 右ノ事件日本政府ノ廳ニ達セシ頃ハ右船司並共船ニ對シ何事モ處置セス却テ船司ノ願ニヨリ夫々取調ノ上右船司ヘ支那人ヲ引渡シ右支那人ニ對シ粗暴ノ處置アルヘカラサルヲ船司ト固ク約シタリ船司共者ヲ決シテ罰セサル趣「テ」約「シ」ナ「カ」ラ「終」ニ「共」言ヲ踐マス手痛ク戒責シタルヨリ自然此吟味ヲ開クニ至レリ是マテノ情實ヲ熟考スレバ日本長官此事ニ携ハルノ不正「テ」ラ「サル」事明瞭ニシテ船司自己ノ所業ヨリ止ヲ得ス此事ニ關係スルニ至

リシモ亦瞭然ナリ
不列顛代理公使ノ陳告ニ因リ吟味ヲ開キシニ旅客ト唱フル者ノ
内ヨリ船中ニテ昔醋ノ取扱ヲ受シ越現ニ訴フルニヨリ即此訴狀
ヲ船司ニ申達シ之ヲ吟味スルニ至リシナリ然ラハ船司ニ報知セ
ズ又船司ヲ糾サ、リシトノ事ハ全ク虚言ナリトス縣廳裁判所ニ
テ吟味ヲナシ訴人「則支那人」昔醋ノ取扱ヲ受シ事ト考定シ其目安
書ヲ作り船司昔醋ノ取扱ヲ爲セシニ付其罪案ヲ作りタリ則其目
安書ハ當國政府ニテ之ヲ許可セシナリ（附録「イ」號ヲ参考スベシ）
吟味中支那人數名ヲ證人トシテ呼出セシニ彼等船中ノ景況ヲ陳
述シ羅網ニ罹リ誰カサレテ止ラ得ス約定ニ謂印セシ越ラ陳シ彼
等生テ救済ニ就スルヨリ寧ロ死スルニ如クナシト決心セシ越ニ
テ再ヒ船中ニ歸ラザルヲ懇願セリ支那旅客ヨリ申立タレ事情ノ
眞偽ハ其頃縣廳裁判所ニテモ之ヲ定メ能ハザリシト雖モ又旅客
ニ其船中へ歸ルハキヲ命シ其責ヲ縣廳ニテ引受ル事ハ好マナリ
シナリ其頃旅客ハ陸上ニアリ彼等ノ陸上ニアルハ船司所業ノ自
カラ然ラシムル事ナレハ其責ハ船司躬ラ任スヘキ理ニシテ敢テ

也人ニ歸スベキニアラス然ルニ船司彼等約定ヲ違背スル越ラ申
立之ヲ出訴スヘキ權理アル旨ヲ主張シ若シ彼等ヲ釋放ス時ハ船
司共權理ヲ立ル能ハサル越ラ申立テシニ因リ縣廳ニテハ其
ニ應シ旅客ヲ差留置事ヲ許諾セリ船司右旅客ヲ差留置ン事ヲ願出タル上
ル旨出訴セシナレ共船司ヨリ右旅客ヲ差留置ン事ヲ願出タル上
ハ之ヲ引受ル亦當ル事ナラスヤ船司何レノ時ニアツタモ右
支那人等ヲ賄フハ其職分ナルベシ殊ニ右支那人旅客ナラシニハ
雇主トノ約定書ニ因リ必ラス此義務存スベシ若シ又旅客ナラフヤ
ル時ハ船司右旅客ヲ故ラニ日本領内ニ連來リシ故自ラ之ヲ賄フ
事亦其職分ノ然ラシムル處ナリ然ラハ右旅客ヲ賄フヘキヲ船司
ニ求ムルノ至當ナルハ敢テ疑フベキニ非ラサレトモ當政府ノ恩
命ヲ以右請未ハ更ニ之ヲ廢棄シ船司ヨリ差出シ置タル儘金子
ハ同人ニ差戻シタリ
將又縣廳ヨリ政府ノ差圖ヲ伺ヒシニ政府ニテ他ノ國々ノ例法ニ
倣ヒ右支那人ヲ無理ニ其船中ニ差歸ス事ヲ拒ミ今尚之ヲ拒メル
ナリ船司ヲシテ彼ノ旅客ト稱ル者ニ付有スル處ノ權理ヲ迫ルヘ

キ機會ヲ得セシムルハ我政府ニテ最モ好ム所ナレバ右權理ノ有
無ヲ決スル一事ハ相應ノ裁判所ニ任セタルナリ
今爰ニ外國領事若干名ノ所爲ヲ評セン楮廳ヨリ支那人ノ訴訟
ヲ亂問スベキ存意ヲ無急度領事ニ報告シ右訴訟吟味ノ上之ヲ裁
斷スル前共斷案ヲ心得ノタメ領事ニ送リタリシニ此厚意却テ外
國領事若干名ノ異論ヲ相キ右縣廳裁判ノ法ニ及論ヲ起シタリ此
異論ヲ權理所有ノ議論ニ涉ラザル者ト見ル時ハ支那人及ヒ條約
未濟國ノ人民ヲ吟味スルニハ當政府ト外國公使等ト取結ヒシト
云ヘル約書ニ據リ神奈川縣令居留地取締長官及ヒ外國領事ニテ
裁判スヘキトノ趣意ナルヘシ然レトモ當政府ニ於テハ此趣意ニ
同意シ能ハス且ツ致同同意セサルナリ又縣廳ノ長官「マリヤル」
前條ノ異論アルヲ以テ領事ヲ共裁判ノ席ニ招待シ能ハサリシハ
豈遺憾ノ至ナラズヤ共故ハ若シ共席ニ領事ヲ招待スルニ於テハ
日本政府ニテ左條ノ趣ヲ許諾セシト見ユレハナリ
第一 船司ニ對シタル此訴訟ヲ吟味セシ裁判所ハ至當ニ創立ス

ル裁判所ニアラザルトノ事
第二 右約書ト稱スル者ノ趣意ニ從ヒ要用トスル時ハ領事ノ意
見ヲ聞クノミナラス又共說裁判所自己ノ意見ニ相違スル時ハ共
說ニ從フヘキトノ事
領事ノ内ニテ申立タル異論並ニ領事會議ノ節辨論セシ廉及ヒ縣
廳ヨリ各國領事ヘ右一件吟味ノ事ヲ報知セシ書簡ハ附錄「ロハニ」
ノ三號ヲ見テ知ルベシ
此一件落着セサル内ニ嘯港鎮臺閣下ヨリ當政府ヘ書簡ヲ送レリ
其書ニ曰縣廳ノ裁判所ニテ嘯港ヨリ八足ヲ移轉スルハ不正ト見
做シタレハ之カ爲葡萄牙ノ聲譽ヲ汚シタリト然ルニ嘯港鎮臺閣
下共意ヲ誤解セシナレハ裁判所ニテハ決テ右様見認ムル事ナク
且斯ク見認メテ之ヲ裁斷スル趣意ハ無之趣當政府ヨリ回答セリ
昔葡萄牙政府ニテ右移民ノ如キ愚弊ヲ防カンタメ規則ヲ創立セシ
主意ハ當政府ニ於テ全ク同意シ且右規則ハ右目的ヲ果スニ足ル
ヘキ者ト信スル趣ヲ答ヘタリ
此一件ハ秘魯支那兩國人民ノ間ニ關ル事ナレバ日本政府ニテ右

兩國人民ヲ等シク保護シ公平ノ處置ヲ爲スヘキ筈且ツ葡萄牙ノ
法律ヲ審シ又之ヲ審シ能ハサル趣ヲ述タリ尤此一件ハ葡萄牙ニ
關係セザルナリウ井スコンヂヤニユリオ閣下ノ書簡並
ニ日本政府ノ返簡ハ附録(ホ)ノ兩號ヲ見テ知ルベシ
縣廳ニテ此一件ノ吟味ヲ始メシハ九月十八日ニアリ則縣廳ニ
送出シタル訴訟並ニ裁斷ノ趣ハ附録(ト、ナ、リ、ス、ル)ノ五號ヲ見テ知
ルヘシ
右裁判書並ニ共ニ記載セル主意ハ固ヨリ當政府ニテ同意許可ス
ル者ニシテ縣廳ニテ裁判ヲ爲サルヲ得サルニ至リシ原由ハ充分
之ニ盡シタリ故ニ今改テ之ヲ詳述スルハ所謂蛇足ニ屬スルヲ以
テ敢テ爰ニ贅セス故ニ此一件ノ當否ハ普ク字内ノ正決ニ任ス
今結末ニ至リ政府左ノ條々ヲ保證ス
第一 此一件ノ處置ハ「マリヤル」船ノ船司自ラ之ヲ相キシ事
第二 當政府ニテ處置ヲ施スニ當リ「マリヤル」船ニ在ル支那人
ヲ保護スルハ共船司ヲ保護スルト同様ニシテ決テ偏頗無之事
第三 此義務ハ左條ニ述ル如ク現ニ之ヲ盡シタル事

日本領海中ニテ殘虐ヲ受ケシ旨支那人之ヲ訴フルニヨリ即之
ヲ亂シタリ
一 當裁判所ヲ開キ約定書ト唱ルモノニ據リ右旅客ヲレテ共約
ヲ果サシメサルヲ得サル旨船司ヨリ顯出タルニヨリ怒ロニ之
ヲ聞亂シタリ然ルニ共趣ハ支那人ノ權理ニ悖リ又斯ノ如キ時
ニ當リ歐洲ニテ施シ來ル處ノ處置ニ及シタルヲ以テ支那人ヲ
船中ニ送歸ス事ヲ拒ミレナリ
第四 此一件ノ處置ヲナスニ當リ葡萄牙 皇帝陛下ヨリ至當
ニ異論ヲ受ルカ如キ事ハ決テ施サザリシナリ
第五 當政府ニテ近隣タル支那國ニ對シ施スヘキ義務ハ則之ヲ
盡シタレハ秘魯共和政治國ニ對シテモ亦同様共義務ヲ盡シタリ
第六 條約未盟國民ヲ管轄レ自己ノ裁判ヲ開キ自主ノ權理ヲ固
存スルニ當リ締盟國ニ對シ何ゾ耻辱ヲ與ルノ意アラフンヤ故ニ毫
モ之ヲ與ヘザリシナリ
今此一件既ニ局ヲ結ビ支那政府ヨリ右備夫ヲ受取リ其本國ニ連
歸セント當國ヘ共理事官ヲ遣ハシタレハ我 天皇陛下ノ政府ハ之

ヲ共。理事官ニ交付セリ故ニ若レ船司或ハ約定人右備夫ニ對シ訴
ヘント欲スル事アラバ以後ハ之ヲ支那長官ニ申立ツヘキナリ

ヨルヤルツ船一件附錄「イ號」

神奈川縣廳吟味目安並見込書

マルヤルツ船ハ困難ニ逢ヒ横濱港内ニ入洋シ其船司ヨリ共船
復中當港へ航泊セン事ノ特許ヲ願出タリ右船ハ帝國ト條約未
濟ノ國ニ附屬スル者ナレハ其船所屬ノ書類ハ當縣廳ニ預リ置タ
リ
右船中ノ者一人右當港航泊ノ船ヨリ逃レ出テ不列顛軍艦アイロ
ンテニク号艦ニ救援セラレシ越不列顛皇帝陛下ノ代理公使ヨリ外
務卿へ書翰ヲ以テ報知ス共書ニ右ノ者苛刻ノ取扱ヲ受ケ懲戒ヲ
蒙リ自主自由ノ權ヲ奪ハレシ様子ナレハ日本長官ニテ此一件吟
味有之度旨申越タリ
右掛合ノ越外務省ヨリ當縣廳へ轉達吟味可致旨命令有之其他船
客ヨリ幽閉苛責又殘酷ノ取扱ヲ受タル越苦情出訴スル事アラハ
取調可申旨ヲモ命セラレタリ
右ノ旨越ヲ體認シ當縣廳ニ於テ吟味ニ及タリ
右吟味ヲ遂ンカ爲許多ノ強證ヲ得證據申立ノ爲右船客タル支那

人二百三十名盡ク當縣廳へ呼出タリ且當縣廳ヨリ取調ノ爲士官
ヲ右船中へ送遣シ右士官ヨリ檢他ノ事情ヲ報告セリ
船司船客ヲ輕蔑シ共船ヨリ出テンドスルヲ力掣拘留シ將タ共内
三人ヲ斷髮閉居セシメ等ノ數件ヲ船司ニ對シ訴ヘタリ
且右船客多人數ヨリ船中ニテ嚴ニ拘留セラレタル旨ヲ出訴セリ
總テ右ヶ條ハ銘々申口並船司ノ申口ヲ以テ判然タリ
然レ共右船客最早船中ニ居ラス又右拘留ヲ請ケザル也
船司右ノ罪ハ當縣廳管内タル横濱港内ニ於テ犯セシナリ
右犯法ニ當テ處スヘキ罰ハ日本國律ヲ以論スレハ大ニ嚴ニレテ
杖百ニ當リ或ハ之ニ代ルニ罪人ノ位階ニ從ヒ一百日ノ入獄ニ當
ル然ト雖モ裁判所ハ共寬典ヲ以テ此罰ヲ許シ得ヘシ
此事件ニ付テハ都テ右景況ヲ察シ又船司ノ爲ニ申立タル諸事ヲ
考ヘ寬典ニ處セン事ヲ欲シ船司ヘレイロ之罪ヲ免シ共船ニテ出
港センコトヲ許容スヘシ
此後若シ船司旅客ニ右ノ如キ罰ヲ與ヘ且共自由ヲ妨ク等ノ行狀
アラハ當裁判所ニ於テ嚴ニ共不理ヲ責ムヘシ

右旅客ハ皆支那人ナレハ當管轄所中ニ在テハ其他ノ在留支那人
同様共權理特許ヲ受テ且共職務ニ服従スヘキナリ
船司共船客ノ不行跡ヲ戒ムル事ハ當縣廳へ可願立ノ處共手續ヲ
ナサ、ルハ亦非難スヘキナリ
右吟味ヲナスニ就キ外ニ十三人ノ者アルヲ知レリ此者共ハ同船
ニ乘組白露國へ赴キ八ヶ年ノ間家僕トシテ仕役スヘキ旨彼等ト
約定取極倭越船司ヨリ申立タリ
右約定書ハ右人物イツレモ少年ナルヲ除クノ外共書面上ニテハ
善良穩當ニシテ別ニ非難スヘキ文體ヲ見ス然リト雖モ右ノ者共
何レモ曾テ右仕役ヲ承諾セシ事アラサル趣駁ト相拒且ツ銘々詐
サレ乘船セシ旨申立又右約定ハ廢物トシテ自身ノ自由ヲ還シ事
ヲ願出タリ
此吟味ヲナスニ就キ所謂奴隸賣買トモ云フハキ右約定並ニ之ニ
類スル他ノ約定ニ付議論起ル事アリトモ當縣廳ニ於テハ決テ之
ヲ思慮決裁スヘキ者ト見サルナリ
若シ右旅客ノ束縛セラレ、約定ノ旨趣ニ基キ當縣廳ニ願立ル事

アラハ共事ハ吟味ヲ遂ケ共案ニベシ
雙方共或ハ共約定ヲ遂ケ或ハ之ヲ廢セン爲共裁判ヲ願フハ共權
理アルナリ
右ノ外船中ノ書類證書所有品ハ當縣廳ニ預リ置又ハ船中ヨリ取
來リシ分トモ都テ船司ヘ送戻スヘキヲ當縣廳ヨリ申渡セ
明治五年壬申七月廿三日

神奈川權令大江 卓

獨逸代總領事サツペ氏ヨリ出セル書「ロ號」

神奈川縣廳ヨリ拙者ヘ渡サレタル目安並裁判書ハ拙者ニ於テ可
ナリトスルヲ能ハス今共故ヲ陳セン
第一縣令ハ米々糾明モセサル犯罪ヲ罰セントスル趣意ナルヲ告
ルト雖モ縣令モ數回是迄ノ糾問ハ只預先ノ吟味ナル趣ヲ述ヘ且
拙者モ共吟味ノ席ニ列リシトアリテ之ヲ證シタレハ結局迄糾明
アリシ後ナラテハ之ヲ裁決シ能ハサルヘシ
第二假令現今ノ糾問ハ正當ニシテ法律ニ悖ラサル者ト雖モ右目
安並裁判ノ趣ニ同意シ能ハス共故ハ取糾シタル申口ハ唯片口ニ
シテ裁判廳ハ只訴人ノ申立而已ヲ聽シ故ナリ右人足ノ結ヒレ約
定書ハ證人ノ目前ニテ雙方ニテ取極メ共約定書ニハ嘯港ニ在ル
官府ノ調印並ニ捕國官吏兩名ノ手記アル者ナレハ共約定ノ正否
ヲ裁決スル前ニ右雙方ヲ糾問セサルヘカラサルナリ
第三差出シタル約定書面ニテハ船司ニ理アル體裁ナレトモ敢テ
之ニ關セス船司ハ人足ノ口ニ只管逆言スト雖モ共言ヲ採用ス

ルヲ甚稀ナリ
第四裁判廳ノ創立ハ千八百六十七年第十月ニ商議セシ約書ノ旨
趣ニ及ス則共約書ニハ縣令締盟米濟國人民ヲ處置裁斷スルニ當
リ若シ要スルヲアラハ各國領事ノ勸告ヲ以テ居留地取締役ヲ
テ管理セシムルトアリ然ルニ此稜國「マリヤルズ」船事件ノ如キ
ハ最モ難事ニシテ大ニ關係アルヲナルニ是迄一度モ拙者並ニ我
同僚ノ勸告ヲ望ムヲ要セス之ニ及シテ裁判所ハ直ニ只縣令及ヒ
横濱ノ狀師ト聞得タルヒル並ニ領事ノ列ニ加ハラサル他ノ外國
官員(敢テ其名ヲ掲ケス)而已ニテ取扱ヒ右人足等ノ事ニ付疑問ヲ
起スヘキ理アル領事各位ニモ前談ナク之ヲ處置セリ右所述ノ約
書ノ主意ニ基ツケハヒルナル者ハ縣令ト各國領事ノ同意ナク裁
判ノ高堅ニ登ルヘキ權アラサルニ同人共堅ニ列シタリ右一件ハ
暫ク置キ拙者又左ノ要件ヲ論セサルヲ得ス則チ日本政府此事件
ノ裁決ヲ擔當スルニ足レルヤ否之ヲ篤ト勸辨セシニ日本政府ハ
決テ共任ニ堪ユヘキ者ト云ヒカタシ民法刑法共一國國民並ニ
共所有物ヲ管轄シ之ヲ裁判スル權ハ其自國ノ管内ニ任スル外國

人民並ニ其所有物ニモ推及スヲ普通ノ則トス譬ヘハ國以中ニテ
犯レタル罪科或ハ過失ハ其國中ニ居住スル外國人ヲ裁決スルノ
權アリ
是故ニ「マリヤルズ」船並ニ其船司ヲ日本官員裁斷スルノ權アリ
マ是レ不審ノ一事ナリ共故ハ
第一船司並ニ彼ニ托サレタル物件(則チ其船)ハ日本國內ニ在留ス
ル者ニアラスシテ風雨ニ依リ勢ヒ不得止當國境內ニ進入シタ
ルナリ然ラサレハ既ニ此境內ヲ航通セシナルヘシ
第二稜國ノ旗章ヲ揚ケ大洋ニ於テ犯シタル罪ハ同國內ノ事件
ニ異ナラサルヲ以テ日本官員ニテ之ヲ歸スルハ不適當ナリ
第三日本管外ノ地方ニテ外國人等互ニ結ヒタル約定ノ實否ヲ決
スルモ亦不適當ナリトス
是故ニ右人足ヲ船ニ歸ラレメ若不得止事情アラハ港內ニテ犯シ
タル犯罪ノ爲ニ船司ヲ定法ニ依テ亂スヘシ是レ拙者ノ勸告スル
處ナリ

エトワルド、サツベ識

千八百七十二年第八月二十九日日耳曼會食所ニ於テ領事集
之事「ハ号」

列席

丁林總領事	イ、ア、パウ井ール
葡國領事	イ、ロレイロ
荷蘭代領事	ア、イ、ボードイン
伊國領事	エフ、アリユニー
獨逸代總領事	エ、サツベ
米國領事	シ、オ、セバルト
英國領事	ロスセル、ロベルトソン
サツベ氏	「マリヤル」船事件ニ付日本地方官ヨリ達セラレタル裁
判書	ノ趣不同意ノ廉ヲ載セタル書面ヲ讀上ケタリ
共書面	ノ趣ハパウ井ールロレイロアリユニーノ三氏各同説ナリ
ロベルトソン氏	ハ日本長官ノ目安並ニ裁決ニ同意スル趣ヲ述
セバルト氏	ハ千八百六十七年商議セシ約書ノ主意ハ縣令モ之ヲ
盡セリト考へ且此事件ハ獨リ日本、葡萄牙、秘魯ノミニ關係スル	

ト考フルニ因リ別段存意モ勸告モ爲サ、ル趣ヲ陳ス
 ボードイン氏ノ意見ハ千八百六十七年第十月ノ約書アレハ神奈
 川縣令ヨリ此「マリヤル」船ノ事件ニ付テハ各國領事ノ勸告ヲ
 未ムベキ筈ナル趣ヲ述ヘタリ然ルニ縣令ハ共手數ヲ爲サスシテ
 自己ニ糾彈シ共後各國領事ニ共裁決ノ趣ヲ達シタレハ此事ニ付
 テハ縣令ノ所置ニ同意セス故ニ此裁決ノ責ハ獨リ縣令ニ歸セン
 ヲラ欲スト言フ

神奈川縣權令ヨリ各國領事ヘ送ル書「ニ號」
 第四百四十五號譯文

以手紙致啓上候然者アルモノノ代理人タルリカルフヘレイラヨ
 リ支那人リチヨンヲ相手取候一件並リカルフヘレイラヨ
 入スエジヤムヲ相手取候一件吟味日限來ル水曜日第九月十八日
 午後第二字ト致決定候然ル拙者過日裁判相開候節共裁判御不
 衆知之趣御申越之次第モ候故拙者ヨリ此書翰ヲ以テ直ニ式

下ヲ御招待致候義ニ者難
斷相成候上ハ當吟味之席ニ
者約定書中个條ノ事ニ付各國領事衆ノ内ニテ御辨說相成候御見
込ニ御同意致レ之ヲ默許致シ候姿ニ立至リ候様相考ヘ候拙者外
警省ヨリ右御見込之通リ可取計旨命令並權カヲ受テ不申候間自
己ニテ左様取計候儀ハ難相成候此段得御意候以上
明治五年壬申八月十四日
神奈川縣權令大江卓

各國領事貴下

嘯港兼ナモル鎮臺ヨリ外發卿ニ送ル書「ホ號」
以手紙致啓上候然者秘圖ヘ移住スル支那人爲乘組嘯港ヨリ秘圖
ヘ向去ル五月廿八日出帆セレマリヤルゾ船貴國神奈川港於テ御
取押ニ相成同船ノ船司同港於テ裁判相成候趣致承知候此事件ニ
付テハ葡荷牙國ノ關係ニ有之且一國獨立之權ヲ尊ヒ候ニ付テハ
拙者儀貴國

天皇陛下政府之下ニ滞在セル葡荷牙公使ニ候得ハ右大事件拙者
不解ノ麻者委數御解明不願ヲ得ヤル事ニ候借拙者一覽候裁判振
書核之趣ニテ致拍察候得ハマリヤルゾ船不正ノ取扱ニテモ致シ
候歟又ハ船中ニ於テ意外ニ犯法ノ事ニ及候哉ニ相見ヘ貴國於テ
ハ御關係無之様被存候右船中ニテ犯法ヲナス時ハ共處置獨リ共
船ノ本國則秘圖國ノ所置ニ属シ候事ハ論ヲ待サル儀ニ候得共嘯
港ヨリ支那人移轉ノ條ハ開化ノ國々相互ニ交際スル處ノ基礎タ
ル法則ヲ犯スニモ相當候事ニテ交親ノ國ニ不可有ノ非理ト被存
候
右嘯港ヨリ支那人移住ノ儀ハ拙者ヨリ益出置候規則書ニテ御承
知モ可有之仁慈ニ基キ候法律ヲ以テ保護シ對談ヲ遂候共身自由
ノ轉居ニ候得ハ貴國裁判所ニ於テ嘯港ヨリ支那人ノ移住ヲ不正
ナリトノ申立ヲ御取上ニ相成候ハ不得共意事ニ候
右神奈川裁判所ノ旨趣ハ全ク右ヲ不正トシテ御取上ニハ有之間
敷候得共共振合ニ於テハ右相見ヘ候間此段申進候右裁判ノ儀
ハ拙者ノ論スヘキ處ニ無
得共我國ノ名譽ニ思候故東京並神

奈川滯在我國領事へハ告
置候就テハ閣下ノ御良察ヲ
以右謀々タル謬ニテ可申解様申進
ヘル貴國ノ好友ナル我葡苗牙國ノ聲譽ト獨立ノ權理ニ違ハザル
様致シ度此段可得貴意如此御堅候以上

嘯港兼ナモルノ鎮臺

千八百七十二年

ヒスコント、ドス、ヤニワリヨ

第八月三十日

日本天皇陛下之

外務卿副嶋種臣閣下

外務卿ヨリ嘯港鎮臺へ送ル書「へ號」

貴翰致披見候然者今我日本海ニ在ル秋國國船マリヤルツ號一件
ニ付閣下ノ贈ラレシ書翰ニ不取敢回答申進候然者我奉職ヲ辱ス
ル日本政府ニ於テハ彼ノ嘯港ヨリ出帆セル支那移住民ヲ正道ト

仁義ニ從ヒ保安センコト要用ナリト葡國

皇帝陛下ノ政府ニテ思惟アリシ共條件ヲ今度取調候仕組ニハ更
ニ無之又我裁判所ニ於テモ右規則ハ嘯港ヨリノ移民ヲ進退シ支
那從民等ヲ保護スル爲ニ編制セル者ナル故共主意我裁判所ノ目
的ト相違致シ候事トハ思ヒ不申候
仰葡國ハ親睦ノ國柄故我國ニテモ交際ヲ脩ルニ當理ヲ以テスル
ハ勿論ニ候得共又支那國モ隣端ニテ兼テ共國君及從民共ニ友睦
ノ交誼有之候故共人民ニ對シテ我カ勤ムヘキ職掌ナキニ非ス且
葡國政府ノ正義ト仁惠ノ主意ニ至テハ全然信任シテ他ナリ
若之ニ違フノ主意アルカ如キハ拙者日本政府ニ代リテ急變拒絶
スル處ニ有之候而シテ今般ノ事件ハ専ラ我國ト支那及日本政
府ニ關係セル事明カナレバ閣下如何シテカ此度ノ顛末並此事ニ
付我裁判所ノ所置振ヲ葡國政府ノ聲譽ト利益ニ關係アリト云フ
ヲ得ンヤ之レ拙者鮮得セサル所ニ候以上

明治五年壬申八月

在嘯港

外務卿副嶋種臣

葡國皇帝陛下ノ公使

ウイスコン、一スチヤスワリヨ

閣下

神奈川縣廳ニ於テ千八百七十二年第九月十日原告代言者ヨリ送
出タル願書「ト號」

一原告ハ西班牙國民支那嘴港在住セノルアルメロノ代人
魯從民同國バルタ形「マリヤルツ」船ノ船司ドンリカルドヘレイ

一被告ハ支那人リ「チヨンナリ」則チ此者ハ原告ト取結ヒシ千八

百七十二年第五月二十五日附第八十七號ノ約定書ニ其名ヲ記

シタル「マリヤルツ」船ノ旅客ニシテ當時神奈川縣廳ノ命ニ依リ

陸上ニ留置シタル者ナリ

原告ドンリカルドヘレイラノ代人タルセノルアルメロノ願書左

ノ如シ

第一 被告法ニ從ヒ篤ト勘辨ノ後バルク形「マリヤルツ」船へ乗組

秘魯國へ赴キ乃チ其地ニ在テ若干年ノ間彼ニ勤勞ラ爲ス「フ」支

那嘴港ニ於テ原告ト約定書ヲ取替セタリ右約定ハ其結ヒタル國

法律ニ隨ヒ正レク取結ヒタル者ニシテ遵守スヘク且ツ果サレ

ムヘキ者ナリ

第二 右旅客嘴港ニ於テ秘魯國へ赴クヘキ右同船へ乗込ミタリ

然ルニ同船日本海ヲ航スルニ當リ洋中ニテ頗ル破損ヲ生セシカ

ハ修補ノ爲メ止ムヲ得ス横濱港へ入進シタリ若此損害ナクハ

何ソ當港へ入進スベケンヤ

第三 右修補ヲ加フル間ニ神奈川縣廳右船ニ對シ吟味ヲ始メタ

リ然ト雖モ右船司ヘレイラハ其處置ヲ堅ク拒ミタリ然ルニ縣廳

ノ命ヲ以テ日本士官右船司ノ不承知ニ開セス右旅客ヲ陸上へ連

行カレシカバ其裁決ヲ待ツニ至レリ

第四 縣廳ニテ右吟味相濟シ裁決ニ及ヒタレトモ右旅客再ヒ左

船ニ歸リ共船ニテ秘魯國へ航海スルヲ拒ム

第五。原告此願書ヲ出スニ當リ右船並ニ旅客船主(即船備主)ヘ對シ處置アリシ縣廳ノ所爲ヲ至當トセサル趣又縣廳ハ斯ノ如キ處置ヲ始メ且ツ之ヲ施行スル任ニ當ラサル者ナルヲ陳ス是ヲ以テ原告左ノ趣ヲ願フ

第一。被告自カラ約定ヲ破リシナレハ縣令ト共ニ領事列坐ニテ裁判シ船司ヘ償金ヲ出サシムルカ若シ之ヲ出シ能ハサレハ約定書ノ趣ニ從ヒ舊ノ如ク其船ニ歸リ共船ニテ救國ヘ赴クヘキヲ下命アルヘキ事

第二。被告ニ此吟味ノ入費ヲ拂フヘキヲ命シ且右ノ如ク約定ヲ破リ共カ爲徒ラニ當港ニ滞留セシニ付起ル處ノ償金ヲ船司ヘ出スヘキヲ命セラレヘキ事

第三。原告時宜ニ依リ其他申立ルコアラハ之ヲ償ハシメラルヘキ事

原告代言者

フレアリツキ、ウ井、ダツキンス

手記

第九月十日附原告願書ニ對シ被告代言者ヨリ送付タル辨駁書

[チ號]

神奈川縣廳ニ於テ千八百七十二年第九月十四日

第九月十日附ノ願書ニ對スル回答並ニ辨駁

原告ハ西班牙國民支那嶺港在任セノルアルメロノ代人タル秘魯從民同國ハルノ形「マリヤルソ」船ノ船司ドンリカルドヘレイ

一被告ハ支那人リ「ナヨン」ナリ則此者ハ原告ト取結ヒシ千八百

七十二年第五月二十五日附第八十七號ノ約定書ニ其名ヲ記シ

タル「マリヤルソ」船ノ旅客ニシテ當時當縣廳ニ差留置タル者ナ

リ此一件ニ付支那ノ國民タル被告右船司ヘレイラノ代名タルハ承

諾セサルナリ原告ノ願書中第一章ノ申立ハ被告ニテ承諾セサルナリ

第二章ノ回答トシテ「マリヤルソ」船ニテ嶺港ヲ出帆レ同船多分ノ

取損ヲ受ケ而シテ橫濱港ヘ入船セシ趣ハ相違無之ヲ陳述ス右ノ

外ハ被告ニ於テ一切承諾セサルナリ
第三章ノ四答トシテ被告當該ニ於テ自身並其外乘組ノ人足取扱
方ニ付吟味ヲ受タルハ相違無之ヲ陳述ス右ノ外ハ一切被告ニ於
テ承諾セサルナリ
第四章ノ四答トシテ被告右船ヘ歸リ被國國ニ趣クコト拒ミシ段
ハ相違無之ヲ陳述ス
原告ノ願書中第一章ニ書載セシ約定書ト稱スル者ハ被告ノ記名
調印ヲ得ンカタメ且之ヲ驅役センカタメ被告ニ對シ多少ノ欺騙
ヲ用ヒ威嚇ヲ施シ之ヲ驚怖シ既ニ多少共趣ヲ果レタル者ナレハ
初發ヨリ廢物ニ屬スベシ
右ノ外嘯港ヨリ雷港迄航海スル途中被告ハ妄リニ禁錮セラレ暴
惡ノ取扱ヲ受ケ食物不足シテ殆ト身命モ危ク且酷ナル呵責ヲ受
ケタルナリ是他ナラス皆原告[則チ其代人]ノ所業ニ出タルナリ
右取扱方並ニ呵責ノ仕方ハ原告ノ船備入證書ノ趣意ニ背キタレ
ハ約定違反ナルノミナラス同人[即チ被告]ヲシテ其危險ヲ悉レ右
船ニ立歸リ能ハザラシムルニ至リタルナリ

是ヲ以被告ヨリ當該判所ニ申立ル事左ノ如シ
第一 右願書中第一章ニ書載セシ約定書ト稱スル者ヲ別段ニ果
スヘキヲ命スルハ當該判所ノ職分ナラス故ニ右約定ヲ別段ニ果
ヘキハ下命アラザルベシ
第二 右約定ト稱スル者ハ元來善道^{コントラクト}ニ及スル者ナレハ當該判所
ニテ採用アルマシキナリ
第三 右事情ナルヲ以約定ノ趣別段ニ果スヘキヲ命セラル、理
アルコトナシ
第四 斯ノ如キ約定ハ支那ノ國律ニ違背ス
第五 右ノ如ク脅迫ヲ用ヒタル者ナレハ其景况ヲ以テ右約定書
ト稱スル者ハ初發ヨリ無力廢物ニ屬ス
第六 被告ハ原告ニ補償ヲ拂フヘキ理ナク此手數ノ入費ハ原告
ヨリ被告ヘ拂フヘキナリ

被告代言者
シヨン、アル、ダ、フ、キ、ソ、ン

神奈川縣廳ニ於テ千八百七十二年第九月十日原告代吉者ヨリ送
出タル願書「リ號」

一原告ハ秘魯從民同國ハネタ形「マリヤル」船ノ船司ドシカ
ドヘレイラ

一被告ハ支那人レヤシヤムナリ則此者ト原告ト取結ヒシ千八百
七十二年第五月二十五日附約定書ニ其名ヲ掲ケタル「マリヤル」
船ノ船客ニシテ當時當縣廳ノ命ニ依リ陸上ニ送留置レタル
者ナリ

縣令等下ヘ

右原告ドシカドヘレイラノ願意左ノ如シ

原告ノ後見タルアホウ被告法ニ從ヒ篤ト勤辦ノ後ハルタ形「マリ
ヤル」船ヘ乘組秘魯國ヘ赴キ則チ其地ニ在テ若干年ノ間彼ニ勤
勞ヲ爲スコト支那嘴港ニ於テ原告ト約定書ヲ取替セタリ右約定
ハ其結ヒタル國ノ法律ニ隨ヒ正シク取結ヒタル者ニシテ遵守ス
スヘク且ツ果サシムヘキ者ナリ

第二 右旅客嘴港ニ於テ秘魯國ヘ赴クヘキ右ノ船ヘ乘込ミタリ

然ルニ同船日本海ヲ航スルニ當リ洋中ニテ願ル取損ヲ生セシカ
バ修補ノ爲メ止ヲ得ズ横濱港ヘ入進シタリ若此損害ナクンバ何
ソ當港ヘ入進スベケンヤ

第三 右修補ヲ加フル間ニ神奈川縣廳右船ニ對シ吟味ヲ始メタ
リ然ト雖モ原告ヘレイラハ其處置ヲ堅ク拒ミタリ然ルニ縣廳ノ

命ヲ以テ日本士官右原告ノ不承知ニ開セズ右旅客ヲ陸上ヘ連行
カレシカバ共決裁ヲ待ツニ至レリ

第四 縣廳ニテ右吟味相濟ミ裁決ニ及ビタレ共右旅客再ヒ右船
ニ歸リ共船ニテ秘魯ヘ航海スルヲ拒ム

第五 原告此願書ヲ出スニ當リ右船並ニ旅客船司船主即船傭主
ヘ對シ處置アリシ縣廳ノ所爲ヲ至當トセサル越又縣廳ハ斯ノ如
キ處置ヲ始メ且ツ之ヲ施行スル任ニ當ラサル者ナルヲ陳ス

是ヲ以テ原告左ノ越ヲ願フ

第一 被告自カラ約定ヲ破リシナレハ縣令ト共ニ領事列聖ニテ
裁判シ原告ヘ償金ヲ出サシムルカ若シ之ヲ出シ能ハレハ約定

書ノ越ニ隨ヒ舊ノ如ク共船ニ歸リ共船ニテ秘魯國ヘ越クヘキヲ

下命アルヘキ事
第二 被告ニ此吟味ノ入費ヲ拂フヘキヲ命シ且右如ク約定ヲ
融リ其カ爲徒ラニ留港ニ滞留セシニ付起ル處ノ償金ヲ原告ヘ出
スヘキヲ命セラレベキ事
第三 原告時宜ニ依リ其他申立ルコトアラハ之ヲ償ハシメラレ
事

原告代言者

フレテリツキ、ウ井、デツキンス

手記

第九月十日附原告ノ願書ニ對シ被告代言者ヨリ送付シタル辨駁
書〔ヌ號〕

神奈川縣廳ニ於テ千八百七十二年第九月十四日

第九月十日附ノ願書ニ對スル回答並辨駁

一原告ハ支那碼頭港在留西班牙國人セノル、アルメロノ代人タル秋

一 國國バルタ形〔マリヤルツ〕船ノ船司ドンリカルドヘレイラ
一 被告ハ支那人リーナヨシナリ則此者ハ原告ト取結ヒシ千八百
七十二年第五月二十五日附第八十七號ノ約定書ニ其名ヲ記シ
タル〔マリヤルツ〕船ノ旅客ニシテ當時留置廳ニ差留置タル者ナ
リ
支那國民タル被告ニ於テアホウヲ後見トスルハ諾セサルナリ
原告ノ願書中第一章ノ申立ハ被告ニテ承諾セサルナリ
第二章ノ回答トシテ被告〔マリヤルツ〕船ニテ碼頭港ヲ出帆シ同船多
分ノ暇損ヲ受テ而シテ横濱港ヘ入船セシ趣ハ相違無之ヲ陳述ス
右ノ外ハ被告ニ於テ一切承諾セサルナリ
第三章ノ回答トシテ被告當縣廳ニ於テ自身並其外乗組ノ人足取
扱候ニ付吟味ヲ受タルハ相違無之ヲ陳述ス右ノ外ハ一切被告ニ
於テ承諾セサルナリ
第四章ノ回答トシテ被告右船ヘ歸リ秋國ニ赴クコトヲ記シレ殿
ハ相違無之ヲ陳述ス
原告ノ願書中第一章ニ書載セシ約定書ト稱スル者ハ被告ノ記名

訓印ヲ得ンカタメ且之ヲ驅役センカタメ被告ニ對シ多少ノ欺騙
ヲ用ヒ威嚇ヲ施シ之ヲ驚怖シ既ニ多少共越ヲ果シタル者ナレハ
初發ヨリ廢物ニ屬スベシ
右ノ外嘯港ヨリ當港迄航海スル途中被告ハ英リニ禁錮セラレ暴
悪ノ取扱ヲ受ケ食物不足シテ殆ト身命モ危ク且酷ナル呵責ヲ受
ケタルナリ是他ナラス皆原告[則チ其代人]ノ所業ニ出タルナリ
右取扱方並呵責ノ仕方ハ原告ノ船傭入證書ノ趣意ニ背キタレハ
約定違反ナルノミナラス同人[即チ被告]ヲシテ其危険ヲ恐レ右船
ニ立歸リ能ハサラレムルニ至リタルナリ
是ヲ以被告ヨリ當裁判所ニ申立ル事奉ノ如シ
第一 右願書中第一章ニ書載セシ約定書ト稱スル者ヲ別段ニ果
スヘキヲ命スルハ當裁判所ノ職分ナラサレハ右約定ヲ別ニ果ス
ヘキハ下命アラサルベシ
第二 右約定ト稱スル者ハ元來善道ニ及スル者ナレハ當裁判所
ニテ採用アルマレキナリ
第三 右事情ナルヲ以約定ノ趣別段ニ果スヘキヲ命セラレ、理

アルナシ
第四 斯ノ如キ約定ハ支那ノ國律ニ違背ス
第五 右ノ如ク脅迫ヲ用ヒタル者ナレハ其景况ヲ以テ右約定書
ト稱スル者ハ初發ヨリ無力廢物ニ屬ス
第六 被告ハ原告ニ補償ヲ拂フヘキ理ナク此手數ノ入費ハ原告
ヨリ被告ヘ拂フヘキナリ

被告代言者
ジヨン、アル、ダウ、井、ソ、ン

目次並裁判[ル號]

神奈川縣廳ニテ
神奈川權令大江卓閣下出坐
原告ハ西班牙國從民ニテ支那嘯港ニ在ルセノルアレ、ロノ代
タル被國人民バ、ル、ク、船、マ、リ、ヤ、ル、ツ、船、客、支、那、人、リ、
イ、ラ、被、告、ハ、右、バ、ル、ク、船、マ、リ、ヤ、ル、ツ、船、客、支、那、人、リ、

ニシテ之ニ對スル一案
 一原告ハ秘魯國人ニテ同國バンタムマリヤルツ船ノ船司トシテ
 カルドヘレイラ被告ハ同船ノ船客支那人サイデヤムニシテ之
 ニ對スル一案
 目安並裁判
 右兩條ノ詞訟ニ付考案ニ備ヘンガタメ原告被告雙方ノ代人ヨリ
 持出シタル諸法家ノ意ト法律書ノ助力ヲ借り得タル事甚多シ之
 レ我ガ普ク萬國公法ノ確説ト他國ノ裁判所ニテ一般ニ通用スル
 天然ノ正義ト公平ノ大理トヲ以テ我カ導キトナサン事ヲ希フニ
 因ツタナリ
 日本國既ニ外國ト約ヲ締ヒシ上ハ乃チ共列ヲ俱ニシ共社ヲ同フ
 セリ因テ獨立自主ノ國ニ行ハル、公法ノ規例ヲ稅領遵行ス之ヲ
 稅領スル國ニハ共庸ニ義務乃チ存シ利益乃チ備ル今日本國之ヲ
 知リ之ヲ解セルニヨリ其實存ノ義務ヲ勵ムカラハ共備ハリタル
 權利ト特許トヲ有セン事ヲ希望スルナリ
 前ニ云ヘル詞訟ハ或ハ數種ノ論ヲ含有スルニ因リ之ヲ一々區別

シ考ル事甚便宜ナリトス
 第一案詞訟ノ中彼ノ約書ト名ツタル文書中ニテ之ヲ見ルニ一方
 ハアルタウス又他ノ一方ハ支那人リト云フヨシ右兩人ノ訂立タル
 者ニテセノルアルメロ儀囑港ニ在ルアルタウスノ代ヲ勤ル心ニ
 テ共代トシテ契約ノ書ニ調印セリ
 然ルニ代人ハ共水人ヨリ別段ニ權ヲ與ヘザレハ共代理ノ權ヲ餘
 人ニ移シ能ハサル事普通熟知ノ例法ナリ而シテセノルアルメロ
 モ又代人ト稱スルヘレイラモ又共代人タル者皆何レモ此別段
 代理ノ權ヲ有スルヲ見ス又共代人タル實際モアル事ナシ爰ヲ以
 テ彼ノ共權ヲ甲比丹ヘレイラニ移ス事能ハサルナリ
 爰ヲ以テ甲比丹ヘレイラハ右約定ヲ果サシメン事ヲ求ムル權理
 ナク又夫ニ付訴訟ヲ引起スノ權議決シテアル事ナシ然リト雖モ
 雙方論駁ノ内別ニ共ノ議論ノ是非ヲ熟考スヘキ者アリ
 第一
 彼ノ約定書ト稱スル者ハ曾テ正當ニ設立セシ者歟且約成ルノ
 地ニ才イテハ堅固有力ノ者ナリヤ

第二

右ハ善良ノ道ニ及レタル者ナルヤ

第三

右ハ欺詐ノ譯ヲ以テ虚無ニ属スルヤ又原告不良ノ取扱ニ因テ先ツ共約ヲ破リシ歟

第四

右ハ此裁判所ニテ原告願ノ次第且共意ヲ果サシムベキ者ナリ

第一問右約定ト稱スル者ハ相當正實ニ取結ヒタル趣ノ申立並ニ共結ヒシ土地ニオイテハ堅固ニシテ異サシムベキモノナルヤ否ヲ判然且確然ト證明セザルヲ得ス如何ントナレハ如此約定ハ假令他人へ可讓渡トノ差障アル書体無之共右様ノ約定若シ此帝國中ニテ結ヒタランニハ不堅固且果サシムベカラザル者ナル事確然ナレバナリ右ハ我帝國ノ利益及定法ニ反スル故全ク廢物ナルベシ方今當政府ニテハ常ニ公正不偏ノ規律ヲ以テ政務ヲ執行ヒ而シテ從來屢々人子ノ親タル者又ハ後見ノ者共右ノ如キ約ヲ結

ヒ共目下ニアル子兒ヲ密カニ國外ニ引出シ年限ヲ定メテ人ニ仕

役セシメシ事アリ當政府取調ノ上新ノ如キ約定ヲ廢物トナシテ

虚無ニ歸セシメ右千係ノ者ヲ強迫シテ子兒ヲ共家ニ歸シシム當

縣廳ノ記録ヲ見レハ是迄度々右ノ如キ事アリテ都合二十名ノ子

兒ヲ歸復セシメ事アリ

右様ノ事件我官府ノ廳ニ達スル時ハ速ニ吟味ニ及ヒ手段ヲ盡シ

テ外國へ連性カレシ者共ヲ取戻セリ近頃右ニ均シキ事發起リタ

上海ニ在ル日本ノ領事カテ極メテ其子兒ヲ取回シ之ヲ擁護シテ

日本ニ在ル共兩親ニ引渡セシメ事アリ此條外務省ノ記録ニ見ヘ又

共巨細ヲ當年第九月二十日出抜ノダマツパンダセツト號ノ新聞

紙ニモ出セリ檢此上ニモ一層手廣キ一件ハ日本ノ從民數多布時

嶋ニ連性カレシニ談判ノ上共人々ノ内多ク呼戻サレ我國ニ歸來

レリ此一條ハ外務省ノ記録ニ出タリ右ハ何レニ成程ノ者共ニテ

欺詐ノ所業ニ違ヒシ事モナカリシナリ

原告ノ代理人ヨリ斯ノ如キ一種ノ約定日本國ニモ存在スル趣ヲ

申立此詞訟ノ幫助トモナルヘキ積リニテ引用シタルナレモ當
裁判所ニテハ右約定ノ比例トシテ採用フヘキ者トハ只做サ、ル
ナリ右引用シタル約定ニハ其人々外國へ赴キ而シテ其自國政府
ノ保護ト注意トヲ失フ等ノ要事ハ全ク記載セス右様ノ事ハ當政
府一定ノ方畧ニ全ク反對スル者トス故ニ此地ニテ結ヘル諸約定
ハ都テ廢棄スヘキ者ナルヲ保證スヘシ
一種國內限ノ方法アリテ敢テ國外ニ及ホス意ニモ非ス又世間ノ
注意ヲ促カス意ニモ非スシテ唯一國內ニ存セルアルハ間々アル
習俗ナリ
國內奴隸ノ法一國內ニ存スル時ト雖モ之ヲ輸出シ之ヲ輸入スル
ニ至テハ嚴禁ヲ設ケタル事屢々之レアリ合衆國自今五十年前
ノ先景之ニ當レリ代理人ノ申立タル約定ハ一種異様ノ國內限ノ
仕方ナル故外國ノ裁判所へ如何様申出ル事アリトモ之ヲ果サシ
ムベキ者トレ採用フヘキ者トハ思ハレス
是ヲ以此帝國ノ熟考ヲ經タル一定ノ方畧也トシテ左件ヲ口廣ク
陳述シ得ヘシ共趣ハ

當政府ニ從屬シ或ハ其保護ヲ受ル服役ノ者又ハ其他ノ者共自主
稅服ニ非ス又ハ政府ノ特許ナクシテ國權ノ及フ外ニ帶往セラル
事アルヘカラズ且是ノ如キ主意ニテ取結タル約定ハ皆悉ク廢
棄スベキナリ
此故ニ此ノ如キ主意ノ約定ハ唯取結ヒタル土地ニ於テハ果サシ
ムヘキ者ナルハ證明スヘキ旨上文已ニ云ヒシナリ外國ニテ結ヘ
ル約定ニ付一般ノ法則「レキスロシ」オン「ト」ラク「チユス」約「フ」結「フ」
土地ノ法律ト稱スルモノハ約定ノ制立ヲ掌リ常ニ其法ニ從テ共
約「フ」果「サ」シムヘキナリ然リト雖モ萬國公法ノ本理ヲ尋ヌルニ「レ
キスロシ」土地ノ法律ト「レ」キス「フ」リ「」裁判ヲ施ス土地ノ法律
ト相關ル、時ハ一國公然ノ法ニ從フ時ノ如ク之ヲ廢物トシ且約
ヲ結フ人々豫テ他ノ一國ノ法ヲ知リツ、約ヲ結ヒシ時ト雖モ之
ヲ採用セサルナリホレツワノ著セル千八百六十九年ノ「ゲ」一「ス」エ
ンド、オビニオン、オン、コンスタイ「チ」ユ「シ」ヨ「ナル」ロ「ウ」(書名)二百四
十葉二百四十三葉二百五十葉並ニ「ゲ」ントノ著セル「コ」メント、レ
ク「チ」ユ「一」(書名)第三十九節四百六十二葉及ヒストリーノ著セル

「コンフリクト」(書名)ノ二百五十四節三百二十七節三百二十八節及ヒ惠顧著述ノ萬國公法第九十三節ニ具ヘタ
第二 右約定ハ善良ノ道ニ反レタル者ナルマ當裁判所ニ於テ諸
法書中此ニ均レキ約定ヲ審判セシ例ヲ見ス故ニ此緊要ノ一事ニ
方ツテ據ルヘキ者ナシ然ラハ一般普通ノ法ニ基クヘキナリ彼ノ
約定ト稱スル者ハ世間ノ法則ニ於テ初發ヨリ廢棄スルキ者ト云
フニハ非レトモ右約定ノ体裁ハ之レニ關係アル國ノ外ハ各國ニ
於テモ實ニ容可スヘカラサル者ナリ猶國々ニテハ斯ノ如キ移民
ニ付テハ極テ嚴ナル國律及規則ヲ設立セリ
此處ニ合衆國々會ノ論文決定書國務省ヨリ共公使領事等ヘノ訓
條並ニ千八百六十八年第三版ノ領事館規則書第八十五條同八十
六業且英國政府ノ規則及共訓條並ワントソノ人名ノ證據申立ヲ參
閱スヘシ
右約定書ハ通常者ニ非ス加之約定セシ者共外國ニ赴クベキ旨
ヲ共約定書ニ記載セリ右ハ前條ニ述ル如ク他人ニ讓渡シ得ヘキ
非常ノ書体ニテ最入念詰問スルヲ要スヘキ者ト見ユ右約定書中

ニ載ル束縛セラレシ者ノ形情ハ右約定ニ期限アルヲ除クノ外大
半奴隸ノ役ニ同シ其期限中ハ右束縛セラレシ者ハ最早人ニ非ス
レテ什器ニ齊シ約定書ニ據レバ甲ヨリ乙ヘ乙ヨリ丙ニ讓渡シ得
ベキ者ニシテ相續人ニ傳ハリ又ハ其時預人ナル共者共ノ引受人
ニテ之ヲ取押ヘ得ヘキ者トス共者ノ從フベキ規則ハ假令約定書
中ニ掲アル共共者ハ未タ之ヲ知ラス約定書ヲ取結ヒシ時共者ニ
之ヲ讀開カセシ事ナク又其趣ヲ説明セシ事モ無之旨證人タル通
辨守サウ井ールノ口書ニテ衆知セリ右規則ハ吟味ノ節雙方ヨリ
差出シ能ハザリシ故當裁判所ニテハ其規則ノ如何ヲ知ルコトナシ
假令此仕役ノ時期限定アリト雖モ敢テ其眼目タル主意ハ變フヤ
ルベシ總テ右様ノ者共九十歳又ハ五十歳ニ至リ始テ全ク自在ニ
歸スヘキ律法ニ據リシ者ナレバ共交接ヲ見認メ而シテ之ヲ保護
スベシト雖モ共者共右法律ニ據レル奴隸トモ謂ヒ難シ又名目而
己ノ給料ヲ拂フト云フ箇條ヲ以テ前ニ述ル原由ヲ論トモ謂ヒ難
シ船司ト奴隸トノ交接ニ付裁判所ニ訴ヘ之ヲ吟味スル時ハ雙方
等シキ義務アリト見做シ之ヲ果サシムベシ船司ノ方ニモ亦ニ

固タル義券アリト見認ムルナリ共義務ハ一々之ヲ書面ニ記載セ
サルトモ免カレザル者ナリ則右ハ療用ヲ加ヘ大抵之ヲ遺送ノ
タノ數時間ヲ與ヘ奴隷ノ慰意且必需品ノタラシムル金ヲ遺渡スルガ如
キ是ナリ且如何様口實ヲ設ルトモ被告ヲ讓リ渡スヘキヲ求ムル
ハ正レク奴隷ノ有様ニシテ之ヲ特法ノ力ニ據リ見認ムヘキ者ト
スルハ自然ノ正道ニ反スルナリ且自王國ニ於テ國法又ハ體宜ニ
於テモ必ス之ヲ助クヘキ義務ハアラザルヘシ
第三 約定書ト唱ルモノハ其約定ヲ取結ヒシ節偽言隱言又ハ欺
詐ヲ以テスルカ又ハ苛酷ノ取扱ヲ以テ結ヒタル者ナラシムルハ之
ヲ廢物トセル哉
約定取結ノ事ニ付テハ証據全ク明白ナラズ約定ヲ承諾セシムル
タメニ體ニ偽言及ヒ隱語ヲ用ヒシ事ハ口書ヲ讀ム者ニ於テハ誰
モ疑フ容サル處ナリ然レ共體ニ欺詐ノ者トハ云難シ通辨官ハウ
井ルノ申立ニ右約定書ハ二枚ニ認メ一枚宛雙方ニ遣シタル趣
ナリ其後代書人旅客ニ與ヘシ一通ニ調印ナキヲ心付シニ右
文ニモアラズ又二枚ニ認タルニモ非ス全ク寫ナル趣辨解セリ然

ラバ一方ニテ右約定書ニ鈐シタル印ハ其者ノ實印ニシテ寫ナラ
ストスルハ實ニ奇怪ト云ベシ故ニ此論起ラサルヲ得ス若レ右
ニシ方ニテ自分ニ約定書ヲ所持セサル時ハ此後如何レ彼ノ權
理ヲ立テ又要用ノ時ニ當リ其權理ヲ裁判所ニ證明シ得ル哉被告
ノ所持セル寫ハ領事ノ調印ナク又原文ニアル如ク圖筆掛リセコ
ソチ、コスト、ノ奧印モナシ且被告船司ヨリ苛酷ノ取扱ヲ受ケ船司
共約定ヲ破リタリト申立タリ故ニ此廉ニ付證人多人數ニ聞取シ
又船中旅客ノ容體ニ付テハ其船當港來着ノ上此事ニ關セザル人
々ヲ申立ト大ニ齟齬セリ或人ハ非常ニ苦難ヲ受ケシト云他ノ人
ハ空ク之ニ相及セリ右様各人ノ申立齟齬スル上ハ旅客取扱方ニ
付テハ他ノ情實ヲ以テ正シク之ヲ決スルヲ要トス旅客ノ向出帆
後門モナク且其後絶ズ右船ヲ遺送セント企テシ者アリ又遺送セ
ンタリ船司ニ報セント企テシ者モアリテ之ガ爲旅客ノ内多人數
嚴ニ罰セラレタリ且航海中三人ノ者心ヲ留テ海中ニ投身シ右三
度ノ内兩度ハ之ヲ救助スヘキ意旨アラザリレ又船中ニ於テ
モ數度多人數遺送セント企テシ事アリシガ皆連戻シタルナラ

トソノ氏此旅客ト譏
後及ヒ通辨官モ之ヲ拒ント
メ手出シヲナシタルナリ
申立ニ猶カフ添ユヘキ者ト見做スナリ
航海記ニモ航海中其他ノ者共海中ニ投身セント企テシカドモ之
ヲ取支ヘシ趣ヲ載ス
船中各旅客ニ配與スル場積ハ英國支那旅客ニ付テ定ル法則ニ揭
タル者ヨリ大ニ少ク見ユルナリ原告代理人ノ申立ニハ旅客毎一
人ニ平面十二尺⁷則七十二立方尺ノ場所トアリ然ルニ今當縣廳ニ
在ル「マリアロス」ノ船艙ニハ其間數全長百九尺巾廿四尺半トアリ
兩甲板ノ間船ノ高サ甲板比丹ブルウ井ス(港長ヲ云)ニテ六尺半ト
測リタリ旅客毎二百五十八ニ平面三千尺ヲ要スベシ然ラバ「マリアロス」船
ル時ハ甲板ノ間船ト平面三千尺ヲ要スベシ然ラバ「マリアロス」船
ニテ與ヘ得ヘキ場所ヨリハ尚一倍半ヲ要スベシ
第四 右約定ハ願出セシ如ク且願出セシ夫ヲ果サシムベキニ
ル哉

右約定書ト稱スル者ハ職業苦役ヲ爲サシメントシテ結ヒシ者ト
見ユ共主意ハ被告ヲシテ右苦役等ノタメニ被魯國ニ趣カシム
キ事ニシテ是非共趣ヲ果サシメントスルモ唯其廉而已ヲ以テ
リ右ハ素ヨリ共全体ニ關ル者トシテ考ヘサルヲ得ス且原告通則
ニ據リ公平ノ者トシテ請求ヲナスニハ又公平ノ法ヲ以テセザル
ベカラズ
此處ニ述ル例則且公平ナル外國裁判所ノ仕來ニ據レハ必ラス約
定ヲ果サシムベキマウ裁斷スベキ約定書中ノ緊要ナル个條ハ雙
方ニテ互ニ共約定ヲ果サシメサルヲ得サルト共事ノ欠クベカラ
ザルトニ在ル者ナルヲ當裁判所ニテ知レリ則損込ニ必適スル利
ヒヲナシ且一方ニ對シ裁斷スル前雙方共共約定ヲ果サシムル事
ノ出來ル様裁判所ニテナシ置カサルヲ得ス原目ノ約定ヲ果ス事
能ハナル時ハ枝葉ノ約ハ是非果セシムベキ者ト裁斷セサルナリ
千八百七十年英國ストリー(人^七)ノ「イク」チト、ジャーリスブリ
ゲンス(書名)第十版七百三十一葉ヨリ七百三十五葉「エ」七百九十
三葉「E」及ビ七百七十
追千八百六十八年版ボーウ井ール(人名)

ノ法律字典二巻目五 十八葉、十一葉ヲ見ルベシ
將又裁判所ニテ右例則、確言則原告ノ所行全、正シテ總テ欺計
ノ形情ナク約定ノ趣ハ總テ其个証明白正、ハ之ニ因テ
大ナル苦役ニ逢フベシトノ意義ヲ以テ右未ムル如ク之ヲ裁判セ
ヤルナリナドル(人名)ノ「リージング、ケ―セス、イン、イノ井ナ」ニ
説ケル種々ノ報ヲ見ルベシ則千八百五十年出版二巻目三百七十
二葉ヨリ三百七十四葉ニアリ其他約定ヲ是非果スヘキヲ命スル
ハ獨リ裁判所ノ隨意タル趣ヲ記載セリ
自然公道ノ確固タル主意ニ基キ確定セル法ハ當裁判所考案ニ適
趣スルナリ
人ヲ苦役スル約定ヲ雙方ニテ是非トモ果サシムル事能ハヤル趣
ハ通則ニテ明瞭ニシテ則プロフェスシヨナル(官名)ナバルソンハ
名)ノ約定法第五版三卷三百五十七葉ニ記載シ且千八百七十年版
行ハト―リ、イノ井ナ―ジニリスブリュアンズ(書名)七百九十三
章「エル」ニ之ヲ載ス
前條所述ノ律例ハ總テ内地處分ノ規則ニテ訴訟ニ關ル雙方内地

ノ管内ニ在留スル時ニノミ之ヲ施スヘキ者ナリ
共法ニ因テ裁判所ニテ外國人ヲ共管轄外へ放遣シ其保護ノ外
行カシメシ例ヲ見ズ尤此事ニ就キ豫メ外區ト別段ノ條約ヲ結ビ
共趣意ニ從テ是ヲ處スルカ如キハ敢テ此例ニ非サルナリ
右ハ刑法ニ關ル事件ニテモ同様ニシテ約定書ニヨリ右ノ如キ請
求ヲナス時ハ殊ニ適當スベキナリ
前條引用スル處ノ律例ハ此一件ニ適用スヘキ者ト見做サ故右約
定ハ船司ノ要用トシ申立ル請求ニ果シテ適スル者ナル哉否今爰
ニ之ヲ論セン
若船司ノ望ム通り裁判スル時ハ雙方ニテ共約ヲ果サレムルニ非
スシテ船司モシ共約定ヲ破ラシム事ヲ望ム事アラバ却テ之ヲ助ル
ニ當ルベシ江戸灣外ニアツテハ共船並共船中ノ旅客共當裁判所
ノ管轄外ニシテ則我帝國ノ權外ナリ
譬ハ當裁判所ニテ右未ムル如ク裁斷ヲナ 時、共船共管外ニ航
スベシ此時ニ當ツテ船司若シ右旅客ヲ約定外ノ地則共好ム所ノ
地へ誘行スル事アリ 如何シテ此、如キ船司ノ所食ヲ防ク

キ哉
 船司若シ幸ニ他國ノ着目注意ヲ逃ル、事アラバ右旅客ヲ什器ニ
 齊シキ費収法ノ行ハル、一地ニ携行シ之、無慮ノ取置トシテ費
 却シ得ルナリ故ニ當裁判所ニテ右旅客ニ正當ノ處置ヲ受シムル
 ハ方今ニテモ又右ノ如キ場合ニ於テモ甚難シトス此事情ヲ以テ
 觀レバ實ニ預防ノ權アル事ナシ此故ニ如此事ヲ當裁判所ニテ審
 判スルニ當テハ係テ右事情ヲ考察セサルヲ得ズ
 右約定ト稱スル者ノ結方並ニ雙方ノ所爲ニ付共情實ヲ篤ト取調
 レニ原告ノ方詐僞ナク又其所行全ク正當ニシテ斯ク訴出タリト
 ハ見ヘス且共約定ト稱スル者モ亦正當適宜ナラス又被告ヲ苦メ
 サル者ト云ガタシ
 右取調ノ事情事實且法律ニヨレバ原告申立ノ通リ裁判シ能ハザ
 ルナリ
 原告願譽ノ内若レ被告ニテ之ヲ拂ノ意ナキ時ハ此一般普通ノ訴
 訟手續ヲ變セシ事ヲ請求ス故ニ唯損傷請求ノ旨意ト見做ベシ
 之原告ヨリ右損傷ノ償ヲ取立ル事ヲ當裁判所ニ願フ事ナク現在

設立セザル裁判ヲ天ガタメ猶開カシ事ヲ望メリ
 然ト雖モ損傷ヲ受タル確證ナク原告ヨリモ之ヲ證スヘキヲ望
 サレバ敢テ之ヲ審判セサルナリ
 是ヲ以テ被告ノ勝利ト裁決ス
 第二案訴訟モ被告後見ノ庶ヲ除キ前同様ナリ然レト雖モ約定中
 他人ニ讓渡シ得ヘキトノ趣意ヲ見ズ故ラニ他人ニ讓渡スベキ
 ザル事ヲ記セリ
 若シ右ノ如キ約定ヲ日本ニテ取結事アラバ是亦採用スベキ者ニ
 アラザルハ前段既ニ之ヲ論シタル如シ且航海中ノ取扱ハ前段ニ
 説明シタル通り同様ナリシ
 右約定ハ所謂善良ノ道ニ反スル者トハ言難シ
 前條既ニ許論スル條理ト引用スル法律ノ同例トヲ以テ必フス共
 約定ヲ果スベキヲ命シ能ハズ又損失ノ償ヲモ命シ能ハザルナリ
 右様ノ約定ニハ共損失ヲ償ハレムルハ尋常ノ事ナレ共此事
 件ニ於テハ毫モ其確證ヲ見サルナリ
 原告ヨリ被告後見ア申立ルト雖モ別ニ憑據トスベキ者ヲ

千八百七十二年九月廿六日
 判所ニテ被告ノ勝利ト決裁ス
 越意ヲ以テ至當ニ裁判スベキ者ト見做シテ決定ス是以テ裁
 如ク訴ヘタル哉當裁判所ニテハ共意ヲ解セテ裁モ此訴訟ノ右
 判所ニテ被告ノ勝利ト決裁ス
 越意ヲ以テ至當ニ裁判スベキ者ト見做シテ決定ス是以テ裁
 如ク訴ヘタル哉當裁判所ニテハ共意ヲ解セテ裁モ此訴訟ノ右

神奈川縣廳

外務省ノ命ヲ奉シ
 横濱日就社印行

